

「最も愛すべき人」:

朝鮮戦争帰還捕虜と新中国の英雄叙事の陰*

イムウギョン
任佑卿**

1. 消えた捕虜たち

朝鮮戦争は冷戦時代初の熱戦にふさわしく、激烈なイデオロギー的衝突を包含した戦争だった。停戦を2年も遅らせたほど交渉の最大の障害であった捕虜問題は、朝鮮戦争の国際冷戦的性格を端的に示している。「捕虜の待遇に関するジュネーブ協約」(1949)によれば、捕虜は敵対行為が終了した時は直ちに本国へ送還しなければならないが、米国は前例のない、捕虜に「選択の自由」を与えるいわゆる「自願送還」方針を掲げた。¹⁾「送還される場合、死に至ることが確実な共産捕虜」を強制的に送還するのは非人道的だというのが主な理由であった。「自願送還」の実行によって捕虜がどちら側を選択するかの問題は、自然に両陣営が自分たちのイデオロギー及び体制の優越性を示すことができる競争の舞台と見なされた。史上例を見ないこのイデオロギー戦の最終結果は、米国と自由陣営の勝利と思われた。北朝鮮軍捕虜の半分ほどの6万人余が北朝鮮送還を拒否して韓国に残り、中国軍捕虜は実に3分の2に達する1万4千人余が中国ではなく台湾を選択したためだ。²⁾

送還希望の如何を確認するために実施された捕虜の審査と送還の全過程は、それこそ冷戦の思想地理 (ideological geography) ³⁾ が徹底して貫徹される過程だった。望もうと望

* この論文は2007年政府(教育部)の財源で韓国研究財団の支援を受けて実行された研究である。(NRF-2007-361-AL0014)

** 成均館大学東アジア学院 HK 助教授

¹⁾ 朝鮮戦争期アメリカの人道主義的捕虜政策が産んだ捕虜収容所の性格及びその矛盾的冷戦政治については金學載、「鎮圧と釈放の政治」(『ジェノサイド研究』第5号)、「戦争捕虜の抵抗と反共オリエンタリズム」(『史林』第36号)参考。

²⁾ 一方、韓国軍300人余、米軍21人、英国軍1人は、北朝鮮または中国を選択した。両側の捕虜のうち中立国を選択した捕虜は88人だけだった。

³⁾ 李惠鈴は、米ソ強大国によって任意的に引かれた朝鮮半島の38度線が、ある日を境に南と北を分ける領土的境界であると同時に思想及び理念となって人々の移動と配置を規律する権力・知識として作動することになった事情を調査し、これを理解する概念として「思想地理」を提示した。それによると思想地理はエドワード・サイードの心象地理を援用したもので、『生と共同体の秩序化にあって根本的な人間の存在・場所に対する想像力と規律が特定の領土や場所を理念化する表象体系を軸に作動した冷戦の事態を指示』する。思想地理とは、思想的に敵対的な空間、場所に対して実証的知識と経験以上の想像的な性格を帯びるという点で心象地理の性格を内包しており、ひいては「思想-人身-領土」の三位一体を強要する規律として冷戦の構造的暴力性を指し示してもいる。李惠鈴、「思想地理(ideological geography)の形成としての冷戦と検閲:解放期 廉想涉の移動と文学を中心に」(『尙虚学報』第34集、2012)参考。

むまいと本国送還者は「親共捕虜」、送還拒否者は「反共捕虜」と烙印を押されねばならなかったし、それとともに中国と北朝鮮は共産主義者の、韓国と台湾は反共主義者の排他的領土として固定された。そうした点で捕虜送還の全過程は朝鮮半島の 38 度線から始まり中国両岸間の海峡につながる境界線を中心に、韓国と北朝鮮、中国と台湾がそれぞれ対立する東アジア冷戦の思想地理が完成される過程でもあった。しかもこの思想地理は、血書、入れ墨、自害、リンチ、殺害、断食、脱出の試みのような多様な方式で捕虜個々人の身体を通じて刻まれた。捕虜の身体そのものが思想地理、すなわち『思想一人身一領土』の三位一体を要求する規律⁴⁾が貫徹される舞台であり、理念の領土を表象する場となったのだ。捕虜の身体は冷戦ヘゲモニーをめぐる国際的利害関係が衝突するイデオロギー戦場であったが、その苦痛はそっくり個人の持分だった。絶え間ない思想証明要求に応じねばならなかった捕虜個々人の苦痛は、それぞれの領土へと送還された後にも続いた。

台湾を選択した中国軍捕虜は、蒋介石国民党政府により「反共義士」として推戴された。「反共義士」たちは、台湾はもちろん世界各地を巡回して捕虜収容所での体験を知らせる講演に動員された。台湾へと敗退した後、風前の灯の境遇に置かれていたが朝鮮戦争によりかろうじて再生の機会を得ることになった蒋介石国民党政府としては、「反共義士」こそ自身の国際的存在性を確認し、中国の唯一の合法政府としての正当性を確認させてくれる申し分なく立派な宣伝素材に違いなかった。「捕虜」に対する否定的イメージにもかかわらず、蒋介石政府が彼らを中国共産党の暴政に抵抗し命をかけて「自由世界」に投降した「義士」と推戴したのもそのためだ。国民党政府は、彼らが台湾に到着した 1954 年 1 月 23 日を「1.23 自由の日」に指定し、その後も毎年、国家レベルの大規模記念行事を挙行するなど反共主義宣伝の最前線に彼らを活用した。

一方、彼らに関する再現も根気よく行われた。彼らの韓国の捕虜収容所での経験、特に青天白日旗掲揚闘争を素材に作られたブロックバスター映画<1 万 4 千人の証人（一万四千個証人）>は、1962 年第 1 回金馬映画祭で優秀映画賞を受賞した。台湾に行った 1 万 4 千人以上の「反共捕虜」は、世界冷戦の初期に台湾と自由陣営の初勝利を証明する「証人」として同時に「自由世界の守護者」として英雄化された。国民党が失脚し、台湾独立を志向する民進党の勢力が大きくなるまで、彼らの存在は国民党政権の正当性を対外的・対内的に確認してくれる生き証人になっていった。にもかかわらず、実際に彼らに自由と豊かな人生が保障されたのではなかった。彼らは自由世界の守護者として、国民党軍隊に入隊して忠誠をつくすよう要求され、大部分が一生貧困と偏見と失郷民としての孤独に苦しめられ、多くの人々がそのために配偶者を見つけられないまま独身で過ごさねばならなかった。

一方、死を顧みず本国送還を選択して中国に戻った 6 千人余の「親共捕虜」たちは、さらに不幸な生活を送った。しかも彼らは、台湾に行った「反共義士」のように冷戦の生き証人になるどころか、その存在まで完全に正当でなかった。多くの辛酸と苦難の末に帰国した彼らは、全員が遼寧省昌図県に設置された「帰来人員管理处」で審査を受けた後、1954 年夏に解散した。審査の結果 2900 人余の共産党員のうち 91.8%が党籍を剥奪され、ようやく 120 人余だけが党員として残った。だが、彼らも全員が党内で警告処分や観察処分を

⁴⁾ 李惠鈴の前掲論文、143 ページ。

受けた。そして帰還捕虜 6 千人余の中で 700 人余が軍籍を剥奪され、4600 人余は捕虜になる前の軍籍だけが認められた。⁵⁾ その後も帰還捕虜は反右派闘争と文化大革命のように度重なる政治的苦難に苦しめられねばならず、さらに「反逆者」として批判されることもあった。文化大革命が終わり、1980 年になって政府ははじめて彼らの党籍と軍籍を回復させ、転役軍人としての待遇を受けられるよう公式に指示した。

そのような事情だったので、多くの帰還捕虜が実質的に復権された 1980 年代後半まで、中国で帰還捕虜に関する叙事はほとんど空白状態であった。中国大陸で発表されたものうち帰還捕虜を扱った最初の文学作品は、1979 年に発表された孟偉哉の短編小説「戦俘」だと推定される。それも帰還捕虜が主人公ただだけで捕虜体験より帰還後に国内で体験した政治的逆境に焦点が合わされており、発表当時、捕虜叙事というよりは文革直後の傷痕文学程度に評価された。⁶⁾ 本格的な捕虜体験叙事はそれから再び 10 年以上が過ぎてようやく登場し始めた。1987 年の巨済島捕虜収容所の体験を扱った碧野の長編小説「死亡の島」と大鷹が編んだインタビュー集「志願軍戦俘紀事」を筆頭に、于勁の「厄運」(1988)、王国治・曹保明の「一個志願軍戦士の経歴」(1990)、高延賽の「重囲」、「絶地戦歌」、張沢石の「我従米軍集中営帰来」(1988)、「一個志願軍帰俘的遭遇」(1992)、「戦俘手記」(1993)、「我的朝鮮戦争」(2000)、「考驗」(1998)、賀明の「忠誠」(1998)、「見証」(2001)、艾偉の短編小説「戦俘」(2011)などが相次いで出版された。⁷⁾ 捕虜の帰還がなされて 30 余年ぶりに、はじめて彼らの体験が世間に知られるようになったのだ。その間、捕虜叙事に対する研究がほとんど皆無なのはもちろんだ。

事実、韓国軍捕虜だった朴震洪の手記「帰ってきた敗者」(歴批、1981)でも示されているように、どの国でも帰還捕虜に対するまなざしは優しいばかりではない。だが朝鮮戦争後の韓国の場合、捕虜体験に関する叙事が、捕虜本人はもちろん多くの作家によって粘り強く発行されてきたことを見れば、それがイデオロギーに対する深刻な挑戦にならない以上、少なくとも捕虜叙事そのものが禁止されたのではなかったことがわかる。「反共捕虜」を「反共義士」として推戴した台湾では、言うまでもなく相当な宣伝資料が蓄積されており、それについての研究もかなり発行されている状況だ。唯一、中国においてのみ冷戦時期の捕虜関連の言説がほとんど不在だったわけだ。捕虜収容所の極端なイデオロギー対立の中でも、最後まで祖国を裏切らずに生きて帰って来た「親共捕虜」の経験は、中国共産党政府の立場から見ても体制宣伝のために十分に活用するに値するものだった。にもかかわらず、彼らが全員政治的に粛清されたという事実は全く意外というほかはない。これについては何より当時の帰還捕虜政策と審査過程をめぐる政治的力学についての実証的研究が先行しないと疑問が確実に解けないものと思われる。

ただ、明らかなのは最小限 30 年もの間、朝鮮戦争捕虜は中国社会において消えた存在

⁵⁾ 蔣慶泉口述、寇徳印整理、「「英雄儿女」‘王成’原型成為戦俘之後」、『炎黄春秋』2011 年第 11 期、20 頁。

⁶⁾ 孟繁華、「崇高、在他的作品中高高飞翔-孟偉哉軍事題材小説創作漫評」(『当代文壇』1984 年第 2 期) 参考。

⁷⁾ その他に 1983 年 440 人余の帰還捕虜インタビューと政府資料、知人との座談などの記録である呉錦峰の『安德舎筆記』もあるが、過度にデリケートな問題を扱ったためか、依然として出版できず複写本だけが出回っているという。大陸外で出版された捕虜叙事としては張愛玲の『赤地之恋』と哈金の『戦争廢品』がある。

だったという点だ。そして数十年も持続した捕虜叙事の空白、そして今でもそれについてのフィクションや研究成果がほとんど出てきていないということは、少なくとも中国社会のなかで朝鮮戦争捕虜問題が残した歴史的省察の課題が今までずっと放棄されていたり、あるいはそれほどそれを難しくする何らかの条件が依然として存在していることを示している。しかも 1950 年代に豊富だった抗米援朝戦争叙事と中国人民志願軍に対する限りない称賛を想起するなら、それとくつきりと対比される捕虜叙事 30 年の空白は、より一層尋常ではない。氾濫する英雄叙事と空っぽの捕虜叙事、この興味深い対比現象は何を物語るのか？ あるいは新中国で氾濫した英雄叙事こそ捕虜叙事 30 年の空白を説明する一つの鍵にならないだろうか？ 帰還捕虜に対する政治的判決は当時の政府の政治的選択だったとしても、その後 30 年間の帰還捕虜に対する社会的差別と抑圧、あるいは完全な忘却の問題は、知らず知らずに全社会的に内面化された何らかの大枠での合意なしでは不可能でなかったのだろうか？ さらにその大枠での合意こそ帰還捕虜に対する忘却の文化的底辺になった可能性が大きい。そうした点で本格的に捕虜叙事を扱うに先立ち、この論文は中国人民志願軍を指し示す「最も愛すべき人」という英雄の表象を通じて、捕虜叙事 30 年の空白の文化的底辺が何であったかを兆候的に読み解いてみようと思う。

2. 朝鮮戦争と新愛国主義の英雄叙事

2.1. 模範人民の表象、「最も愛すべき人」

韓国では、朝鮮戦争に参加した中国軍を一般的に「中国共産軍」または「中国義勇軍」と呼ぶ。しかし彼らの正式名称は、まさに中国人民志願軍である。朝鮮戦争、いわゆる抗米援朝戦争に参加した中国軍は、中華人民共和国の正規軍を指す中国人民解放軍と区別して、中国人民志願軍と名付けられた。当初、朝鮮を助けるという意味で「支援軍」という名称も提示されたが、人民の自発的な国際的連帯行動であることを強調するために「支援」を「志願」に変えた。だから韓国の人々が「中国共産軍」と呼ぶ彼ら、また朝鮮戦争当時、国連軍捕虜収容所に監禁されていた中国軍捕虜一大陸に帰還した「親共捕虜」はもちろん台湾に行った「反共捕虜」も、本来の身分は全て中国人民志願軍である。多くの韓国人にとってこれら人民志願軍は、みすぼらしい軍服にまともな武器もない前近代的軍隊、人海戦術で真っ黒な人波として押し寄せてくる恐ろしい存在あたりとして記憶されている。しかし中国で彼らはそれとは全く違うイメージで再現され記憶された。代表的なものが、まさに「最も愛すべき人」という別称だ。韓国の、みすぼらしくて恐ろしい「中国共産軍」イメージと、中国の「最も愛すべき人」というイメージとの間隙は、20 世紀の各国の民族主義と冷戦陣営間の距離と同じくらい遠く見える。

それでは中国人民志願軍がこのように「最も愛すべき人」と呼ばれることになったのは、いつからだったのだろうか？ それは戦争当時、朝鮮半島の前線から送ってきた一つの通信文、まさに「誰が最も愛すべき人なのか（誰是最可愛的人）」（『人民日報』1951.4.11.）から始まった。著者である魏巍は、題名のように誰が最も愛すべき人かと尋ねた後、前線で直接に見聞きした事例を紹介しつつ人民志願軍こそ最も愛すべき人だと強調した。当時の

中国人民解放軍総司令官だった朱徳は、魏巍のこの文を見て、「よく書けている、本当によく書けているなあ！」と賛嘆の念を禁じえず、毛沢東主席は直ちにこれを全軍に配布するよう指示した。また、中央文学研究所所長であり中共中央文芸宣伝部処長であった小説家の丁玲も、魏巍のこの文は一つの通信文であるだけでなく文学作品であり、それも最も立派な文学作品だと高く評価した。⁸⁾ また、朝鮮戦争が終結した直後に開かれた全国文学芸術家代表大会(1953.9.23)で、外交部長だった周恩来はこの文が「数千万読者を感動させ、前方にある戦士たちの士気を培った」として、その場で特に魏巍を呼んで直接感謝の言葉を伝え、一緒にいた全国文学芸術家代表は魏巍に向かって雷鳴のような拍手喝采を送った。⁹⁾ これだけを見ても魏巍の通信文一つがどれほど多くの人々の注目を集めたのか察するに余りある。

本来、中国語の「可愛」は「愛らしい」、「可愛い」、「可愛らしい」という意味で、普通子供や若い女性に使う言葉なのだが、魏巍はこれを殺伐たる戦争を遂行している軍人を修飾する言葉として選択した。この斬新な修飾だけでも、中国人民志願軍は一気に非常に懐かしくて身近な隣人あるいは家族のように感じられるほどであった。もちろん韓国で国軍を「国軍将兵のおじさん」と呼ぶように、中国にも「志願軍のおじさん(志願軍叔叔)」のような別途の身近な呼称が存在した。だが、これは主に幼い生徒たちだけが使うもので、「最も愛すべき人」のように老若男女を問わずほとんどすべての中国人に通用する全国的用語ではなかった。最近韓国でよく使われる「国民の妹」や「国民のおじいさん」のような流行語を借りるならば、当時の中国人にとって中国人民志願軍は国民が注目し支持して愛情を送った「国民の恋人」に近かった。「最も愛すべき人」は、まさに「国民の恋人」の1950年代中国式表現だったとでもいおうか。

だが、中国の「最も愛すべき人」は、「国民の恋人」のように単に一時的に流行する文化的消費記号というだけではなかった。それは直接的には戦場に対する支援の必要性から始まった政治的動員の記号であり、もう一歩進んで誕生したばかりの新中国の国民、さらに正確に言えば「人民」のモデルでもあった。一例として、『最も愛すべき人を助け、最も愛すべき人を見習い、最も愛すべき人になろう！(支援最可愛的人、向最可愛的人学习、成为最可愛的人!)』という抗米援朝の時期の中国全域でよく聞くことができるスローガンであった。「最も愛すべき人」は、次第に新中国「人民」の道徳的模範としての地位を構築していった。それだけでない。時間が経つほどに「最も愛すべき人」は道徳的評価の基準にまで格上げされた。『最も愛すべき人に申し訳なくないのか!』という言葉は、1950年代の中国人の間で最も厳しい叱責だったという。また、反対に当事者である中国人民志願軍(後には中国人民解放軍)の間では、『君が最も愛すべき人になる資格があるか!』という言葉が最も厳しい批判だったという。¹⁰⁾ これは1950年代を経て中国で「最も愛すべき人」が、軍人だけでなくほとんどすべての国民の日常を評価する道徳的基準として内在化されていたことをよく示している。

⁸⁾ 丁玲、「読魏巍的朝鮮通訊」、『文芸報』1951.5.25。第4巻3期。

⁹⁾ 「誰是最可愛的人」の經典化過程に対しては姚康康、「魏巍 誰是最可愛的人「的經典化道路」(『鍾山風雨』2014年第5期)を参考。

¹⁰⁾ 吉梯才、「戦闘熱情最可貴 - 漫談魏巍同志抗米援朝時期的散文」、『解放軍文芸』1960年8期。

魏巍の「誰が最も愛すべき人か」は1951年パンフレットとして出版されると同時に22刷を重ねて数十万冊が販売された一方、中高等学校の語文教科書にも収録されてその後も40年の間全国中高生の必読作品としての地位を享受した。抗米援朝戦争を体験しなかった事後の世代にとって、朝鮮戦争のイメージと記憶は何よりまさに魏巍のこの文を通じて形成されてきたといっても過言ではないだろう。歳月が流れ中国人民志願軍は歴史の中に埋もれても、「最も愛すべき人」という言葉だけは21世紀の現在でも相変わらず中国人民解放軍の愛称として使われるだけでなく、社会主義建設の道徳的モデルを広範囲に示す代名詞¹¹⁾のように使われている。国家主権を保護するためにいつでも生命を捧げる準備ができて自国の軍人を英雄視するのは国民国家の普遍的叙事戦略であるとしても、このようにその軍人を全国民が称賛し同一視して学習対象としたり日常的な道徳的基準にまで表象化するケースは珍しいといわざるをえない。

2.2. 抗米援朝と新愛国主義的英雄

それでは一つの通信文がこのように人々の熱狂的な呼応を引き出し、永らく社会的影響を及ぼし得た理由は何だろうか？ それは、丁玲の言葉通り、魏巍の文がその時代と場所の要求をよく表わしていたことと無関係でないはずだ。それなら「誰が最も愛すべき人か」が表わした時代性とは何だったのだろうか。後ほど魏巍本人はそれに対してこのように語っている。

……差はあるが人民志願軍の共通点は、偉大な祖国に対する愛、朝鮮人民に対する深い同情、そしてこのような思想的基礎の上に作られた革命的英雄主義だ。偉大で奥深い愛国主義及び国際主義思想と感情こそ、私たちの戦士を勇猛にさせる最も基本的な動力だ……これこそが最も本質的なことであり、「誰が最も愛すべき人か」はまさにそれに関する物語だ。¹²⁾

魏巍の言葉通り「誰が最も愛すべき人か」は、三つの事例を通じて志願軍の愛国主義と国際主義、そして革命的英雄主義を浮き彫りにした。米軍との松高峰戦闘で死んでいった志願軍についての強烈かつ迫真の描写は、死をも辞さない人民志願軍の反帝愛国主義精神を謳い上げ、朝鮮の子供を救おうと死をもものともせず火の中に飛び込んだある兵士の話は人民志願軍の国際主義的仁義を強調した。そして祖国にいる人民の平和と幸福のためならば、いかなる苦勞や犠牲も耐えられるという、ある兵士との対話内容は人民志願軍の革命的英雄主義を如実に表わした。確かに魏巍は時代的要求を的確に把握し、その叙事戦略は有効だった。高位の要人たちが彼の通信文にそれほど熱狂したことも、彼が指摘した愛国主義と国際主義が実際に1950年代初期の新中国の政治社会運動を貫く新愛国主義教育の核心テーマだったからだ。

愛国主義は実はすべての国家で普遍的に鼓吹されるが、その具体的内容はすべて同じも

¹¹⁾ 李建軍、「重読「誰是最可愛の人」」、『文学自由談』2009年5期。

¹²⁾ 魏巍、「「誰是最可愛の人」写作經過及体会」、『軍事記者』2001年4期。

のではない。国共内戦で勝利して建国したばかりの新中国も例外なく愛国主義を強調したが、既存のものとは区別して「新愛国主義」と呼んだ。それなら新愛国主義運動において共産党が強調した新しさ、すなわち新愛国主義の固有性はどこにあるだろうか？ それは二つに要約される。第一は共産党政権の人民性であり、第二は人民性の拡張としての国際主義だ。¹³⁾

まず、ここで言う人民というのは、一般的に国民国家の三つの充足要件と言われる「国民」とは異なる。人民はあくまでも階級的観点を内包している。例えば新中国初期の新民主主義段階で人民というのは、すなわち労働者、農民、プチブルジョア、民族ブルジョアを含んで非常に具体的な階級連合を指していた。それに反して、かつての搾取階級だった地主、資本家そして親日派及び国民党官僚のような民族反逆者は新中国の国民にはなりえても人民であるはずがなく、さらに打倒されねばならない人民の敵だった。国民党を含む過去の政権がこれら人民の敵を代弁する反動政権だったとすれば、新しく誕生した新中国は人民の代表である共産党が政権を握る人民の国家だ。人民の国家とは、すべての主権が国民にあるのではなく人民とそれを代表する共産党にあり、人民の敵に対しては却って徹底的に独裁を実施する人民民主独裁体制を標ぼうする国家である。

このように旧政権とははっきりと異なる階級指向を持った新政権では愛国の性格も異ならざるをえない。人民の敵が政権を掌握していた過去の国家で進歩的愛国主義運動が政権に反対することだったとすれば、新中国で進歩的愛国主義というのは、まさに国家とその政権である共産党を擁護して愛することになる。¹⁴⁾ 新中国は人民が国家の主人であり共産党は人民の利益を代弁する唯一の党であるからだ。したがって人民の国、人民の政権を愛することである愛国は、すなわち人民が自らを愛することにほかならない。例えば過去の労働者にとって労働は、資本家の利益に服務する搾取労働に過ぎなかったが、これからは人民が国家と工場の主人になったのだから労働者の労働は社長ではない自分自身のためのもことになる。¹⁵⁾ そうした点で愛国という「公德」と利己の「私徳」の領域区分も崩れるほかはない。¹⁶⁾ 新中国の愛国主義の第一の新しさが、まさにここにある。

¹³⁾ 新中国の新愛国主義運動と抗米援朝に対してさらに詳しいものは、何吉賢、「中国の再発見 - 新愛国主義運動と新中国の国際観を通じて形成された中国の自己理解」、『冷戦アジアの誕生: 新中国と朝鮮戦争』(文化科学社、2013) 参考。

¹⁴⁾ 新中国の臨時憲法といえる「中国人民政治協商会議共同綱領」(1949.9.29.)は、特に祖国、人民、労働、科学、公共財化を愛さねばならないという新しい道徳観を提示したが、これもまた新中国が人民の国家という前提下に成立する。

¹⁵⁾ 新中国の初期の工場保護運動と増産競争運動もこのような脈絡で成立した。今や工場の主人は労働者自身なので主人意識を発揮して工場の財産を自分のもののように大事にし保存して生産効率を上げるために自発的に努力しなければならないということだ。もちろん資本主義社会でも「愛社」と公共財物の保護は重要な徳性として要求されるが、会社の主人が少数の資本家である限り、それはさらに効率的な搾取のための洗練された修辞に過ぎないことがほとんどだ。反面、新中国は土地改革を通じて農民に土地を分けてやり、相次いで合併会社、人民公社を建設して都市では集団所有制、国有制を全面的に施行して人民を実質的主人にしようと考えた。もちろん日増しに肥大化される官僚システムと党 - 国家体制による新しい人民疎外現象が現れるなど、もう一つの問題を産んだりもしたが、少なくとも集団所有制と国有制を通じて名実が一致するように「人民」が主人になる国家を建設しようと思ったという点で新中国の指向が私有制を通じて民主を保障しようとする資本主義国家と厳格に異なったのは明らかだ。

¹⁶⁾ 楊甫、「人民的新道徳観」、『中国青年』第30期。1950.1.14

一方、新中国の愛国主義のもう一つの新しさは、まさにその国際主義的志向にある。それによると、人民性に基ついた新愛国主義は、狭い保守的民族主義や国粹主義とは異なる。新しい人民観によれば、愛国主義は人民の範疇を民族国家の向こう側に拡大することによって、世界各国の人民を抑圧し搾取するすべての資本主義・帝国主義勢力に反対することでなければならない。自然に新愛国主義は人民的国際主義へと拡張される。当時『中国青年』に掲載された議論によれば、国際主義は米国の「世界主義」と正反対のものだ。国際主義がすべての民族抑圧に反対し、すべての民族の平等を主張する、いわゆる「プロレタリアの世界観」だとするならば、米国の「世界主義」は一つの帝国主義国家が全世界とその他の民族を統治するために動員された思想であり、「反動的ブルジョアの世界観」であり、「ファシスト帝国主義」というものだ。¹⁷⁾ このような新中国の新愛国主義のモデルは、まさにソ連の新愛国主義運動であり、全世界労働人民の愛国心は『全世界労働人民相互間の愛と協同、尊敬と血盟関係、偉大な国際主義の土台の上に樹立された新愛国主義、すなわち最高形式の愛国主義』¹⁸⁾ とであると主張された。このような全世界人民の国際主義は、冷戦初期の社会主義陣営内部に共通したイデオロギー的認識だった。新中国の新愛国主義のもう一つの新しさがまさにここにある。

このような新愛国主義運動は建国初期から進められたが、それが集中的に再議論されて社会運動として外化し始めたのは、1950年10月抗米援朝戦争が開始される頃だった。建国初期の新愛国主義教育が、主に新政権の性格及び人民の道德観に焦点が合わされていたとすれば、抗米援朝戦争の時期の新愛国主義は、抗米援朝戦争の正当性を理解させることに焦点が合わされた。朝鮮を助けて米帝国主義の侵略に抵抗するという抗米援朝の名分は、被抑圧人民間の友愛と連帯を核心としつつ、その国際主義精神の究極的志向は再び保家衛國、すなわち国と家庭を守る愛国主義にあると強調された。それにより、当時の大部分の抗米援朝愛国主義叙事は、次のようなマスタープロットによって構成された。

- 1) 新中国成立以前の帝国主義侵略、地主、買弁資本、国民党治下でボロを着て苦痛を受けていた人民
- 2) 帝国主義勢力と搾取階級側である国民党反動政権を追い出して新中国建設。
ついに訪れた平和の時代、共産党政権の下、人民が主人となる生活の基盤作り
- 3) 米帝国主義者が朝鮮を侵略し、再び祖国の平和と安寧を威嚇。
- 4) 苦勞して得た平和と勝利の果実を守り、朝鮮と中国の人民政権を守護するために抗米援朝戦争に参加

抗米援朝戦争は危機に直面した朝鮮人民を助ける国際主義的戦争であり、究極的には中国を守る愛国主義的で正しい戦争として強調された。そうした点で抗米援朝戦争とその実行のための国内運動は、名実共に新愛国主義運動であるのみならず、その絶頂だった。実際に人民解放軍の他にも数多くの農民、労働者、青年学生たちが、この新愛国主義的呼びかけに呼応して中国人民志願軍になった。戦線に出て行った軍人だけでなく、国内の人民

¹⁷⁾ 許邦儀、「談談国際主義与党愛国主義」、『中国青年』第50期(1950.10.21.)、韋君宜「我更感到祖国的可愛」、『中国青年』第56期(1951.1.13.)を参考。

¹⁸⁾ 伐西裏耶夫、赫路斯托夫 主編、『論愛国主義』(作家書屋、1951年初版)翻訳者序言、何吉賢の前掲論文、215頁再引用。

も自身ができるすべての方式でこの戦争に参加するように激励された。¹⁹⁾ 人民と呼ばれた彼らは長い間の試練の末に得た勝利の果実、人民の政権と人民の国家を保衛するために誰より自発的に参加する義務があった。

「人民志願軍」が完全な虚名ではなかったわけだ。彼らにとって新中国は、日帝及び反動国民党政権との戦いで勝利をおさめた偉大な国家であり、だから愛すべき国家だ。²⁰⁾ この愛すべき人民の国家を保衛するために命を捧げて戦いに行った人々が中国人民志願軍であったから、魏巍が彼らを「最も愛すべき人」と命名したことや、また多くの人々が魏巍の呼称に共鳴したのもおかしなことではない。彼らは全員、共産党が建設した新中国の「新しさ」に対して幅広い期待と支持を送り、自ら喜んで人民になろうと思った。そして「最も愛すべき人」は、いつのまにか人民の模範であると同時に英雄と呼ばれ始めた。

1952年3月、中国文連朝鮮戦地訪問団²¹⁾を率いて朝鮮半島の前線を訪問した作家の巴金は、中国人民志願軍総司令官の彭徳懐に面会するために待っていた瞬間を次のように描写した。

私たちはこんな人を待っていた。彼は他の人が自分を名指すのを望まないというが、全世界人民は全て彼を偉大な平和の戦士として尊敬する。全世界のお母さんは皆、彼に感謝する。彼が朝鮮のお母さんと子供たちを救ったからだ。全中国の人民は、彼のところに行って感謝の言葉を伝えたがる。彼が祖国のお母さんと子供たちの平和な人生を守っているからだ。世界平和のための彼の貢献に比べようとすれば、祖国保衛のための彼の貢献に比べようとすれば、その前に立った私たちはあまりにも取るにたりない。そのせいで彼の足音がますます近くに近づいてくると、あえて近づきたい一種の畏敬感が突然私たちを緊張させた。²²⁾

当時、巴金がすでに名高い中年の作家だったことを想起するならば、彭徳懐に対する彼の称賛が少しは気恥ずかしいようだ。だが先に述べた新中国の愛国的熱気から推察したところ、それがイデオロギー的検閲を意識した偽善的陳述だと急いで決めつける必要はないようだ。それよりここで注目しようと思うのは彭徳懐司令官に対して自らを限りなく低めている巴金（と作家たち）の態度だ。この態度によって彭徳懐司令官と彼らの間に作られる「触れることのできない」距離、その心理的距離こそ人民の中から英雄が作られる瞬間であり場所であるためだ。その距離はまさに世界平和と祖国保衛に対する彭徳懐の「貢献」に対する「畏敬心」に由来している。「貢献」の目標が極めて大きく崇高であるほど、そして「貢献」の過程が難しければ難しいほど、その「畏敬心」は大きくなるだろう。世界平和と祖国保衛はどれほど神聖な目標なのか！そしてその目標のために命をかけて戦

¹⁹⁾ 任佑卿、「朝鮮戦争時期中国の愛国公約運動と女性の国民形成」、『中国現代文学』第48期(2009.3)を参考

²⁰⁾ 韋君宜「我更感到祖国的可愛」、『中国青年』第56期(1951.1.13.)

²¹⁾ この訪問団は抗米援朝総会ではなく全国文連が組織したもので、団長の巴金を含み古元、葛洛、白郎、茵子など18人の作家で構成された。これらは1952年3月16日から10月まで約7ヶ月の間北朝鮮で前線生活をした。孫海龍、「抗米援朝文学に現れた中国の朝鮮半島認識」(成均館大博士論文、2011) 71頁。

²²⁾ 巴金、「我們会见了彭徳懐司令員」、『志願軍報』1952年4月11日。

う兵士たちの革命的英雄主義はどれほど偉大なのか！ 巴金が彭徳懐から感じた「近づきたい」距離と「畏敬心」はまさにこのような愛国主義の発露であった。ここで彭徳懐及び彼が代表する人民志願軍は「最も愛すべき人」に終わらず、いつのまにか新愛国主義的英雄へと昇格する。人民はいつのまにか英雄になるべく名前を呼ばれているのだ。戦争という緊急な現実の中であって、人民は自ら主人にならねばならないが、同時に「近づきたい」距離の向こう側で自らを英雄化することで自己疎外の道を大きく開いたという点は非常に逆説的だ。

2.3.犠牲の物神化

新愛国主義運動が抗米援朝戦争期にピークに達し、少なくない人々の支持を受けたことは事実でも、それは単に二三の政治宣伝だけで成されたものではなかった。実際、思想的名分は感情的同一視が成される時、より大きい効果を発揮する。彭徳懐司令官に会った日に、一緒に会ったある幹部の話に巴金はこのように書いている。

『人には感情があるものです。戦士たちは心が非常に細やかです。ある戦士は火薬を背負い敵の戦車に飛び込んで命を投げ出しました。本当にすごい人ですよ。彼は本当に深い感情を持っていました。自分を犠牲にするというのは決して容易なことではないですよ。そのような感情をそのまま埋もれさせておいてはいけません。私たちにはそれを広く明らかにして祖国の人民に知らせる責任があります。』甘主任は本来よく笑う人なのに、この時は声がひどく震えて興奮したようだった。彼もまた深い感情を持った人だったのだ。私たち文芸工作者も感情がある人間だが、あれほど偉大な心に接しては、個人の全てを差し出さないでいられるはずがないではないか？²³⁾

巴金は命を犠牲にした戦士とその物語を伝えてくれる甘主任、そして甘主任の話の聴衆である文芸工作者を全員が深い「情感」を持った人々として描写している。ここから死の政治的名分よりは、死を選択する瞬間そのものの悲壮さが普遍的感情として浮き彫りにされる。もちろん新しい人民観によれば、「米帝に対する燃える敵がい心と朝鮮人民に対する限りない同情」のように、「情感」というものもまた極めて政治的である。実際に上の引用文で甘主任が「情感」について話す時も、そのような階級的政治的立場は自明なものとして前提になっている。だが自明な立場自体が、いつも感動を与えるものではない。しかもその立場に率先して同意できない人々にとっては、より一層そうである。ところが巴金は戦士の情感、甘主任の情感、そして文芸工作者の情感を一致させることによって、命を犠牲にした戦士に対して、政治的立場でなく「情感」を通じた同一視の過程を見せてくれる。立場に比べ「情感」は、さらに多くの人々に普遍的でさらに深い響きを与えることができるのだ。

特に死ほどその情感を強く刺激するものも稀である。巴金が語ったように、全てのもの

²³⁾ 巴金、前掲文。

を下ろした一個人の献身的死は、名分以前にそれ自体で感染力を発揮して他の人々まで彼にならって「全てのものを下ろすように」決心させる力を持つ。愛国主義と国際主義的名分をめぐって行う戦争で進んで命を差し出したということは、その名分の神聖さを引き立たせる最高の政治的行為にほかならない。この死の政治的名分は、いわゆる「情感」的共感を通じて、さらに容易に大衆的に確認され正当性を取得して行く。志願軍の戦士の死に対する「情感」の同一視を通じて、全社会的に抗米援朝戦争の政治的正当性がより一層強固になる効果を発揮するのだ。死そのものに対する感情的投射、この情動的過程こそなぜあれほど多くの人々が一全員であるはずはないが一このイデオロギー戦争に自発的に身を投じることができたのかを示している。そしてなぜ従軍記者や作家が、大小の犠牲と貢献の中でも、特に命を犠牲にした戦士らの物語を探して前線を東奔西走したのか、なぜ後方の人民はもちろん前線の人民志願軍自らもそのような英雄の伝説にあのように熱狂²⁴⁾したのか、そして犠牲がどのように抗米援朝叙事の花になったかを。

今回の激戦は延々8時間も続いた。……激戦が終わった後、烈士の死体はさまざまな姿勢で乱雑に広く散らばっていた。敵の腰を抱きしめた者、敵の頭を抱えた者、敵を地面に荒々しく叩きつけたまま首を絞めている者、敵と一つになって一緒に火に焼かれてしまった者等々。ある戦士は手に、脳漿が一杯くっついた手榴弾を一つ固く握っていた。その傍に一緒に死んでいた米兵は、頭が割れて周りが全部その脳漿でドロドロになっていた。また、ある戦士の口は敵の片方の耳に噛みついていて、ある烈士は両手で強く敵に抱きついていてどうしても離れなかったので、死骸を埋める時に仕方なく指を全部折らねばならなかった。²⁵⁾

死骸そのものについての魏巍の描写が生々しすぎて、その惨たらしさに我知らず顔をしかめてしまう場面だ。ところでこの惨たらしい死骸は例外なく全てがただ一つの事実だけを物語っている。火炎弾の火を背負って自身の体を武器にして敵と戦って共に死んでいった人たちが、どれほど敵、米帝国主義を憎んでいたのか、それで死ぬその瞬間までもどれほど激烈に戦ったのか、敵将を固く抱きしめて一緒に水に身を投げた朝鮮の論介のように、彼らの敵がい心と愛国心がどれほど決然としていたのかを。これらの死骸は、全て死んだ人の反帝国主義の愛国心を証明する物化された証拠として置かれている。引き続き魏巍は、これらの烈士の名前を永遠に記憶するように新中国の記念碑に刻もうと言いながら、彼らの名前を一人一人呼んだ。王金伝、邢玉堂、井玉琢、王文英、熊官全、王金侯……そして名前が分からなくなったある無名の戦士まで。命によって新愛国主義を体現した人民志願軍の烈士たちは、生き残った者のこの記念行為を通じて「愛すべき」人民の英雄に、それも「最も愛すべき人」に生まれ変わる。

実際に朝鮮戦争当時、朝鮮半島で命を失った人民志願軍の数だけでも 11 万人を超えており、後ほど帰国してから死亡した人まで合わせれば 18 万人を超える。それゆえ、その

²⁴⁾ 巴金と共に朝鮮戦地訪問団に参加した茵子によれば一般戦士たちもまた英雄話を聞くのが好きで自分たち同士でたびたび伝説を作り出したりもしたという。茵子、「我従上甘岭来」、『人民文学』1953年2期。

²⁵⁾ 魏巍、「誰是最可愛的人」、『人民日報』1951.4.11。

うち自ら命を捧げた英雄の話は有り余るほどある。有名な上甘嶺戦闘で味方の進路を確保するために全身で敵の銃弾を防いだ黄継光、爆薬筒を持って敵陣に飛び込んだ楊根思、味方の位置が発覚しないようにしようと体についた火を消さずに声もなく死ぬまで持ちこたえた邱少雲、押し寄せる敵を一網打尽にするために自身を爆撃しろと叫んだ于樹昌、真冬の凍結した川の水に落ちた朝鮮の子供を救おうとして命を失った羅盛教……²⁶⁾

それらのうち少なくない数の話が通信文に、報告文学に、学校教材に、映画や小説に不断に転載され、再構成されて流布された。人民志願軍の犠牲に関する多くの英雄叙事は、新政権、新中国の愛しさと大切さをより一層理解させ、政権の民族的合法性を承認させ、その主人である人民の間の一体感を高揚させた一番の貢献者だった。新愛国主義的人民の共同体の空想はこれら英雄叙事を通じて質的に飛躍したと言いうる。考えてみれば少なくとも筆者が知る限り、朝鮮戦争が産んだ韓国軍英雄の話は聞いたことがないが、中国の場合、あれほど多くの英雄が再現され記憶されたという事実は比較史的に吟味してみる必要がある。その差の原因は色々なものがあるだろうが、ひとまず確実なのは南北朝鮮の場合、朝鮮戦争はどのみち「同族相争う」悲劇だったが、中国では人民的友愛のために犠牲を払った正しい戦争として位置づけられたという点だ。「同族相争う」戦争は、すでにその名分からして英雄が出現しにくい構造なのに比して、正しい戦争ならその名分そのものが英雄を必要とする構造を有する。

ところで、あふれ出る英雄の犠牲叙事は、初めから犠牲そのものを絶対化して道徳化する傾向を伴った。犠牲は共同体のための殺身成仁の姿勢、大公無私の態度を代弁するという点で、共同体の道徳性の標準と見なされたのだ。しかも死は共同体の構成員に生き残った者の負債意識を残す。一般人の間で「最も愛すべき人に申し訳なくないのか」という非難が可能だったこともこれと関連する。それほど「最も愛すべき人」が道徳的標準とまで見なされたことは、人民志願軍に対する高い道徳的要求が全社会的規律にまで拡大したことを示している。問題は、これが絶対化・道徳化する間に人民志願軍の犠牲を当然視することはもちろん、さらに犠牲を遠慮なく要求することになったという点だ。いつのまにか犠牲を払えなかったという、あるいは自らすすんで犠牲にならなかったという理由で人々を非難することになったのだ。犠牲はそのように物神化された。捕虜はまさにその物神化の中で自らすすんで犠牲にならなかった者と見なされた代表的な人々だった。

3.英雄叙事の隠し絵

「英雄儿女」(1964)は、抗米援朝映画の正典で新中国以来最も多く愛された作品の一つだ。映画の中で人民志願軍の王成は、満潮のように押し寄せてくる敵軍をせん滅するため味方の指揮官に『私を爆撃せよ!』と要求したかと思えば、ついには爆薬を背負って敵陣に飛び込み壮烈な戦死を遂げる。これに対し王成の妹である王芳は「英雄賛歌」を作っ

²⁶⁾ 統計によれば抗米援朝戦争期間の特等功臣 217 人、1 等功臣 154 人をはじめとして 3 等功以上の功臣が 30 万人余を超える。そしてそのうち 282 人の功臣が英雄や模範称号を授与された。「中国人民志願軍全軍湧現大批英雄模範和功臣」、『偉大的抗米援朝運動』(人民出版社、1954) 633 頁。

て彼の英雄的行為を賛え、戦士たちの士気を高める。映画の中でだけでなく外でも、王成は抗美援朝戦争期の最高の英雄の形象として永らく人口に膾炙される人物になった。「英雄儿女」は巴金の小説「团圆」をリメイクしたものだが、この原作では王成は英雄というほどの人物ではなかった。元記者であり「英雄儿女」の製作に参加した洪爐の回顧によれば、映画にリメイクされる時、王成の比重が小さすぎ犠牲の業績もないという指摘があつて、実際の英雄である于樹昌と楊根思の行跡を結合して王成という英雄人物を作り出したという。²⁷⁾

ところが 2004 年、崔永遠が進行する TV ドキュメンタリー番組「電影伝奇」で洪爐が意外な証言をする。「英雄儿女」の王成の本来の実際のモデルは蔣慶泉だったというのだ。

「戦地報」記者の身分で前線を渡り歩いた洪爐は、1953 年 4 月、押し寄せる敵の前に力不足な状態で敵と共に死ぬ覚悟で『私を爆撃せよ』と叫んだ後に戦死した蔣慶泉の知らせを聞いた。彼は直ちに蔣慶泉の英雄的死に関する報道文「頑強的声音」を書いた。ところが発表を前に国連軍が提示した捕虜名簿で思いがけず死んだと思った蔣慶泉の名前を発見した。蔣慶泉は死なずに捕虜として捕らえられたのだ。当時の規定によれば捕虜として捕らえられた者についての話は発表できなかった。残念がっていたところに洪爐はウィスチャンという兵士が蔣慶泉とよく似た死を迎えたという知らせを聞いて、前述した文章のうち一部だけを修正した後「私を爆撃せよ（向我開炮）」という題名に変えて発表した。この文は「人民日報」、「人民文学」、「中国青年報」に掲載され、国語教材にも収録されて広く知られるようになった。²⁸⁾

だが、実際のモデルだった蔣慶泉の話はそれ以降完全に埋もれてしまった。捕虜にならなかったなら、蔣慶泉はあの有名な王成の実際の人物であると共に革命的英雄として永遠に優遇されただろう。しかし不幸にも（？）爆撃された瞬間に死なずに負傷したまま捕虜になったために彼の人生は完全に変わってしまった。蔣慶泉は帰国した後、審査で党内処分を受け故郷に戻った。多くの帰還捕虜が党籍と軍籍を剥奪されたのに比べれば、それでも緩い処分だった。彼が故郷に戻って、彼が死んだと思って与えられた革命烈士資格は取り消され、烈士に提供された食糧配給企画も中止されてしまった。その後の反右派闘争の時や文化大革命の時も、彼は常に「変節者」として名指しされ批判を受けねばならなかった。そのうち偶然に村の映画館で上映される「英雄儿女」を見て、王成の話がまさに自分の話であることを知った彼は、家に帰って人知れず涙をぬぐった。一生を村の片隅で農民として埋没して生き、家族にさえ朝鮮戦争に参戦した話は一切しなかった彼であった。1980 年代に帰還捕虜に対する再審が実現して復権されるや彼は大声で号泣した。これまでの人生があまりに無念であったためだ。故郷に帰ってから、常に目の痛みと頭痛に苦しめられた彼は、復権後、再び補助金も受け、医療上の恩恵も受けることになったが、彼にとって戦争捕虜になった経験は今でも口外しづらいトラウマだ。

一時代を風靡した英雄形象が誕生する過程で、そのモデルになった実際の英雄は、ただ捕虜になったという理由だけで歴史の暗闇に葬られてしまった。蔣慶泉は回顧インタビューで、『あの時、爆撃さえちゃんとしていたら！あの時死んでいたなら捕虜にならなかつ

²⁷⁾ 山旭、「尋找“王成” - 紀念抗美援朝 60 周年」、『瞭望東方周刊』2010 年第 22 期。

²⁸⁾ 蔣慶泉に関する話は、すべて山旭の前掲文を参考にした。

たはずなのに……』と悔恨に浸った。戦場からの生還は喜ぶべきことでなく、むしろその後の人生全体を不幸にさせたくびきになってしまったからだ。それは帰還した捕虜全員にとって似たりよったりであった。帰還捕虜の復権のために先頭に立った捕虜代表の張沢石も自身が捕虜になった1951年5月27日を永遠に忘れることができない。²⁹⁾ 張沢石の記憶から永遠に消えないその日のように、帰還捕虜には捕虜になったその瞬間が、あたかも永遠の原罪のように位置づけられている。生と死が交錯したその瞬間が、すなわち捕虜と英雄を交錯させた瞬間だったからだ。自らの意志でなく不可抗力で捕虜になったにもかかわらず、彼らはその瞬間に自らすすんで犠牲にならなかったという理由で非難されねばならなかった。英雄の犠牲の話があふれ出て、その価値が増殖する間に、いつのまにか犠牲そのものは物神化されて、もう一つの疎外を産んでいたのだ。

そうした点で1950年代を風靡し、新中国の愛国主義をとどろかせた抗米援朝英雄叙事は、同時にもう一つの抑圧叙事でもあった。新中国は冷戦と民族国家建設の状況で、自覚的人民の誕生を追求し、人民は主観的能動性を持つ新しい道徳的主体になるように求められていた。その中でも抗米援朝英雄は、新愛国主義的名分のために主観的能動性を最大限発現させた主導者として想像された。その主観的能動性は、さらに不可抗力の状況にあってすら生死を管轄できる万能の力と見なされた。国民党や共産党は双方ともに、捕虜になる代わりに、いっそ犠牲になることを要求したことは同じだが、共産党の場合、その要求がより一層苛酷だった。人民が主人になる国家というのは、資本と欲望の増殖を抑制できる高度な道徳的社会でなければならず、共産党はそのような社会を建設していく原動力として人間の主観的能動性を信じた。腐敗による国民党の没落と対照されるように、共産党はより一層鮮明な道徳的純潔を前面に出す必要があったし、そうであればあるほど道徳的人間としての主観的能動性は強調されるほかはなかった。そして犠牲はその最も高い体现の境地であった。

だが人民の主観的能動性に対する行き過ぎた過信であったのだろうか。道徳的純潔性に対する強調は、共産党が国民党との対決で勝利を獲得させた主要な力であったし、あの多くの英雄を誕生させた滋養分になったが、皮肉にもその道徳的純潔性に対する強調こそ、共産党内部からの破裂と失敗を招く原因になった。捕虜送還競争で3分の2にもなる人民志願軍が中国ではなく台湾を選んだのも、相当部分は捕虜になったという事実自体に対する共産党の非難、純潔でない者に対する内部処罰を恐れたためだ。人民の模範が直ちに死を媒介とする犠牲的英雄と同一視されたのも、そして犠牲になれなかった、あるいは自らすすんで犠牲にならなかった者に対する非難と共に犠牲そのものが物神化されたのも、結局のところ道徳的純潔性に対する強迫に由来していたわけだ。結局、冷戦の核心は、誰がより人間を変えることができるのかについての道徳的対決にあったのだろうか。ともあれ数十年持続した捕虜叙事の空白が、新中国の広範囲な道徳的英雄主義及び犠牲の物神化と深く関連していることは明らかに思える。

²⁹⁾ 張沢石、『我的朝鮮戦争』金城出版社、2011。

【参考文献】

中国青年

中国婦女

中国新文学大系

偉大的抗美援朝運動、人民出版社、1954

吉悌才、戦闘熱情最可貴-漫談魏巍同志抗美援朝時期的散文、解放軍文芸 1960 年 8 期。

孟繁華、崇高、在他的作品中高高飛翔-孟偉哉軍事題材小說創作漫評、当代文壇、1984 年第 2 期。

山旭、尋找“王成”-紀念抗美援朝 60 周年、瞭望東方周刊、2010 年第 22 期。

姚康康、魏巍「誰是最可愛的人」的經典化道路、鍾山風雨 2014 年第 5 期。

魏巍、「誰是最可愛的人」寫作經過及体会、軍事記者 2001 年 4 期。

李建軍、重讀「誰是最可愛的人」、文学自由談、2009.5。

蔣慶泉口述、寇德印整理、「英雄兒女」‘王成’原型成為戰俘之後、炎黃春秋 2011 年第 11 期。

張沢石、我的朝鮮戰爭、金城出版社、2011。

丁玲、讀魏巍的朝鮮通訊、文芸報 1951.5.25。第 4 冊 3 期。

金學載、鎮壓と釈放の政治、ジェノサイド研究第 5 号。

_____、戦争捕虜の抵抗と反共オリエンタリズム、史林第 36 号。

金虎雄、『6.25』戦争と南北分断に対する省察と文学的叙事 - 中国文学と朝鮮族文学を中心に、統一文学論叢 第 51 集、2011。

朴宰雨、中国当代作家の朝鮮戦争題材小説研究、中国研究、第 32 卷、2003。

白元淡、任佑卿編、「冷戦」アジアの誕生:新中国と朝鮮戦争、文化科学社、2013。

孫海龍、抗美援朝文学に現れた中国の朝鮮半島認識、成均館大博士論文、2011。

李永求、魏巍与韓國戦争文学、中国研究第 42 卷、2008。

李惠鈴、思想地理(ideological geography)の形成としての冷戦と検閲:解放期 廉想涉の移動と文学を中心に、尚虚学報 34 集、2012。

任佑卿、朝鮮戦争時期中国の愛国公約運動と女性の国民形成、中国現代文学、第 48 期、2009。

趙大浩、上記外の朝鮮戦争記録文学研究 - 「誰是最可愛の人」を中心に、中国学論叢 第 23 冊、2007。

【中文摘要】

直到 20 世纪 80 年代，在中国有关志愿军战俘叙事一片空白。本论文试图从新中国的英雄主义和‘牺牲’的异化现象寻找其文化根源。‘最可爱的人’这一词源于魏巍的一篇战地通讯，指的是参与抗美援朝战争的中国人民志愿军，如今还在使用之称为社会主义道德建设模范。抗美援朝保家卫国这一名称本身包含着一种浓烈的国际主义和爱国主义的内涵，抗美援朝运动是新中国新爱国主义运动的最高潮。‘最可爱的人’便是新中国人民应该向他学习的榜样，

也是新爱国主义英雄的代表形象。但是，共产党一向对道德上纯洁的执着导致对英雄的牺牲特别强调及牺牲本身的道德化、绝对化。“你对最可爱的人对得起吗？”这一句道德性指责在普通人们之间普遍出现，这也与牺牲本身的道德化和异化并不无关。在抗美援朝期间随着被牺牲的英雄急剧增加，甚至竟然逐渐出现了将个人的牺牲视为理所当然并无理地要救牺牲的现象。整个社会不由得开始以不被牺牲或自己不做牺牲的理由责难个人。战俘正是被看作为不做自己牺牲的人们。在中国战俘叙事长期的缺席，可以说渊源于新中国英雄主义的道德偏向和牺牲的异化现象。

关键词：‘最可爱的人’，抗美援朝，战俘，新中国，新爱国主义，国际主义，英雄，牺牲